

だが、そのことは、子規の論説だけを見ていたのではわかりにくい。その俳句そのものを誠実に読み取るところから、少しずつ理解を深めていくほかはない。

「子規新古」は、子規が古風の発句から新しい俳句を紡ぎだしていく様相をたどり、「蕪村発見」は子規にとって重要なその時点をうかがい、「子規饒舌」はその文芸の性格の根柢を大きく考えてみたものである。

はじめに

子規新古

白猫が消えた	8	再び、鳴立沢	32
燃える柿の実	10	道中の雪	34
木を積む小窓	12	雨と枯葎	36
夕立と蓮の葉	14	白と黒	38
九段のともしび	16	眼鏡橋の別れ	40
八重桜散る	18	揚雲雀と胡蝶	42
富士山と日光山	20	馬ほくほく	44
動く風見	22	松林から竹藪へ	46
月は上りぬ	24	落ちる雲雀	48
秋の蚊の哀れ	26	糞譚	50
水戸紀行	28	再び、糞譚	52
鳴立沢	30	汐千狩暗合	54

水田の底あかり	138
楳の雪	136
宿の春	134
馬糞紀行	132
愚庵訪問	130
紅葉砧	128
日光の紅葉	126
唐きびのから	124
遊女ひとり	122
旧派に学ぶ	120
石手川の若鮎	118
ぜんざいの提灯	116
白牡丹三重奏	114
朧夜の浪がしら	112

句歌唱和	166
山を下る夕立	164
社頭の今昔	162
松島前夜	160
青田の風	158
心の裕	156
風に吹かれて	154
立烏帽子	152
懸賞蕪村句集	150
春風の吟	148
池の萍	146
彼岸の入り	144
旧派の味わい	142
馬の鈴	140

再び、白と黒	56
誕生寺のあとさき	58
迷子と捨子	60
十七字には余りけり	62
腹へこへこ	64
真帆片帆	66
五月雨の菅笠	68
信濃へ	70
萌黄浅黄	72
椎の花	74
古風の遊び	76
旅の実感	78
木曾の清水	80
馬籠越え	82

蠅打つ客	84
木曾川下り	86
岩間のつつじ	88
膝栗毛の極意	90
葉から葉へ散る	92
ゆかに上る鶏	94
一つ家に	96
句の姿情	98
大宮の秋	100
案山子の哀れ	102
大山の野菊	104
武蔵野の旅三句	106
床の間の蓑笠	108
燈火十二ヶ月	110

陸羽の通し風
 大石田まで
 最上川下り
 暁霧濛々
 朝霧の滝
 婦女の肌理
 象潟を過ぎて
 芭蕉との別れ
 媚と骸骨
 朝市の旅立ち
 蕪村 発見
 子規 饒舌
 おわりに

186 184 182 180 178 176 174 172 170 168

八郎潟
 蝸と夕日
 白露の小村
 雨の七夕
 五十四郡
 奥州帰り
 しぐれの試み
 芭蕉の年齢
 連載の姿勢
 結び

206 204 202 200 198 196 194 192 190 188

245 220 208

子規新古

白猫が消えた

新を知るには古に拠るに如かず、古を知るには新に拠るに如かず。俳句革新の功によって知られる正岡子規は、新しい俳句をよく知るとともに、また古い俳句にも通ずる人であった。子規の句自体すべてが新しいわけではない。古い風体の句もまた子規の一面である。

子規は十一歳のときから漢詩を学んだ。しかし明治十六年に東京に出てからは、以前ほどに漢詩に熱心でなくなっていた。明治十八年一月、故郷の漢詩の会の仲間であった五友の一人の竹村鍛から手紙がきて、返信をしたためるさい、以前だったら末尾に漢詩を書き添えるところだが、子規はそこに俳句一句を記した。

雪ふりや棟の白猫声ばかり 子規

これが、現在知られる限りでの、子規の最も早い句である。一月八日付の書簡だが、句は雪の降った七日に作られている。時に子規十八歳であった。

ところが、子規が明治十八年からの自作の句を集めた稿本『寒山落木』には、この句は収められていない。『寒山落木』は、一たん記録してから、気に染まぬ句の上に、線を引いて抹消している。明治十八年の作として二十二句が記され、うち十五句に抹消の線が引かれて、結局

七句残されている。その七句中にこの句は見られない。しかし抹消句の中には、

白猫の行衛わからず雪の朝 子規

がある。おそらくこの句が、さきの〈雪ふりや〉の句の改案である。

〈雪ふりや〉の句は、〈雪ふり〉の語が稚拙で、〈声ばかり〉がややしつこく、またわざわざ〈棟〉とまでいう必要はない。子規はまず〈雪ふりや〉をおだやかに〈雪の朝〉にあらためて下五に移す。しつこい〈声ばかり〉をやめて、これもおだやかに〈行衛わからず〉とする。ちよつと気になる〈棟〉は削ってしまう。白猫が雪の白さにまぎれてしまうという旧派俳諧的な趣向を含みながらも、素直な全体の仕立てかたは、のびやかな銀世界のひろがりをおぼせてかなり新鮮である。

〈雪ふりや〉の句は〈白猫の〉と改められて、一度は『寒山落木』に収められた。まだ俳壇は旧派しかない時代だが、この俳句におのずからなる新風の芽生えを見てもいいだろう。しかし結局は〈白猫の〉も作者自身によって抹消される。子規の最初の俳句に出てきて、一度の推敲では生きのびていた白猫は、そこで姿を消してしまう。おそらくこの程度の新しさでは、子規は満足しなかったのだろう。俳人子規の出発点をなすこの句に、すでに子規の意識の中の新古が交錯している。